

第 33 回 甲南英文学会研究発表会・講演会レジュメ

研究発表 14:00~16:00

[英語学部門] 223 講義室

司会：福田稔（宮崎公立大学）

1 「オノマトペ副詞と時間副詞の相互作用からみるアスペクト解釈」

志田祥子（甲南大学大学院修士課程）

青木奈律乃（甲南大学大学院博士課程）

中谷健太郎（甲南大学）

動詞のアスペクト分類に関して、vendler(1957)の四分類は広く知られているが、これらの四分類とは別に、semelfactive（一次的・単動作的）というカテゴリがあるとされている。semelfactive は *hit, tap, blink* のような瞬間的な動作のアスペクト性質を指すが、共起する時間副詞によっては継続的解釈を許すこともある。

- (1) a. *At nine o'clock the princess curtseyed in front of the guests.*
b. *Throughout the evening the princess curtseyed in front of the guests.*

(Brennan & Pytkänen 2008: 142)

(1a)のように瞬間を表す *At nine o'clock* と共起した場合、「その瞬間にお辞儀をした」という瞬間的イベントとしてそのまま解釈することができる。しかし、継続副詞句 *Throughout the evening* と共起した場合は「繰り返しお辞儀をした」という継続的解釈に切り替わる。これは、瞬間的な動作と継続副詞の組み合わせによって起こるアスペクト解釈の不整合を解消するために起こる。

本研究では、(i)「ぴかっと/ぴかぴか」のような一次的/繰り返しのオノマトペ表現がsemelfactiveの解釈の違いを引き起こすのか、(ii)その違いはアスペクト解釈の不整合に繋がるのかを明らかにする。自己ペース読文実験の結果、動詞の後のspillover region（あふれ領域）において継続副詞（e.g., 「～分間」）× 一次的オノマトペ（e.g., 「ぴかっと」）条件のとき読み時間が遅くなり、他条件と比較して有意な差がみられた。この結果は、時間副詞とオノマトペの組み合わせ

せをもとにアスペクト的意味処理を行うことには時間を要することを示唆している。

司会：中谷健太郎（甲南大学）

2 'Raiding the Inarticulate': An Introduction

Nigel. G. Duffield（甲南大学）

*Just where it now lies I can no longer say
I found it on a cold and November day
In the roots of a sycamore tree where it had hid so long:
In a box made out of myrtle lay the bone of song.*

*The bone of song was a jawbone old and bruised
And worn out in the service of the muse.
And along its sides and teeth were written words
I ran my palm along them and I heard:*

*'Lucky are you who finds me in the wilderness
I am the only unquiet ghost that does not seek rest...'*

Josh Ritter *Bone of Song*

In this talk I present some ideas and materials drawn from my forthcoming book *Reflections on Psycholinguistic Theories: Raiding the Inarticulate*, to be published later this year by Cambridge University Press. The book offers a set of reflections on the two 'core areas' of psycholinguistics: EXPERIMENTAL PSYCHOLINGUISTICS, which is concerned with how speakers understand and produce the languages they control, and DEVELOPMENTAL PSYCHOLINGUISTICS (also known as Language Acquisition), which deals with how such control is acquired in the first place. Whereas standard textbooks generally focus on reporting the (quantitative) results of psycholinguistic

research to other experts, the present book is more concerned with a critical examination of “the point of it all” — the philosophical and logical foundations of psycholinguistics.

In addressing these larger questions, I draw on more than thirty years of professional and personal experience. Professionally, I have had the unusual privilege of studying with — and later working alongside — researchers from two intellectual traditions that are regularly opposed: “competence-based” researchers, whose work is inspired ‘top-down’ by Chomskyan theories of grammar vs. “process-oriented” approaches, which advocate more data-driven, cognitive models of language. This double life informs my educated perspective on theoretical questions. Equally important is my personal experience of language acquisition: as a second language learner, as a language teacher, and — most significantly — as the father of three bilingual children, one of whom is a child with Down’s Syndrome. Combining these perspectives yields a work that is part memoir, part monograph, woven together with some of the best song lyrics, comedy sketches and literary quotes of the last 150 years.

(In the talk, I will make reference to the companion website for the book, which is already online:

<http://sonatine4-rti.blogspot.com>)

[英米文化・文学部門] 221 講義室

司会：中島俊郎（甲南大学）

1 「Imitation と Inspiration — Alexander Pope とラテン詩」

山口徳一（甲南大学非常勤講師）

17世紀後半から18世紀初頭のイギリス文学界においては、既存の著作物の書き換えや、模倣が頻繁に行われた。とりわけ、古典からの模倣が顕著であり、新古典主義の時代とも呼ばれる所以である。当代を代表する詩人 Alexander Pope (1688-1744) の作品の多くもまた古典を拠り所としている。

それほどに古典の模倣が頻繁に行われた理由の一つは、王政復古期の文学界における第一人者であり、Pope 自身の師匠とも目される John Dryden (1631-1700) が、作家のインスピレーションの源泉として、古典を参照にすることを推奨したことによる。彼は、nature であれ human nature であれ、それらがあるがままに模倣することこそ詩作のプロセスであるとした。

しかしながらそれは単なる模倣ではない。Dryden は、模倣とは作品の形式的な特徴を猿真似するとか、無差別に借用するということではなく、以前の傑作を生み出したあの不可欠な力を再び捉えることを求める、いわば精神の過程であると定義づける。

つまり、古典を真似ることはそのインスピレーションを受けることであり、自然の倉庫から与えられたものを素材とする古典を模倣することは、即ち、自然からのインスピレーションを得ることと同一であり、また巨匠の精神を把握することで、創造の原動力を共有することにもなる。その結果、詩作とは、ありのままを単に模倣することではなく、模倣したものから作家独自の新たな作品を創作することになるのであり、それこそが芸術であると彼は考えた。

一方で、この新古典主義の時代は、文学史上の黄金時代とも呼ばれ、多くの文芸人が活躍した時代でもある。それほどに多くの作家が存在しえたのは、逆に言えば、彼等の作品を読む読者の増加があったからである。とりわけ18世紀初頭に登場した雑誌、『タトラー』や『スペクテーター』が、格調の高い活字によって、また識字率の上昇ともあいまって、読者層を拡大させることになった。

しかしそのような読者の増加が、一方で、作家による模倣を促進させることにも繋がった。つまり、読者の増加によって、出版物へのニーズが高まり、その結果、創作の才能にあまり恵まれない文士たちが、古典を含め、古い時代の作品や海外の著作の翻訳や翻案を頻繁に手掛けるようになり、Dryden の定義とはかけ離れた、単なる模倣に過ぎない作品が市場に多く出回るようになったのである。

しかしそのような時代にあって、幼少よりラテン語に通じ、ラテン文学に親しんだ Pope は、古典の模倣によって、インスピレーションを得た数少ない詩人の一人である。本発表では、彼の作品の拠り所となったラテン詩との比較を通して Pope 作品の検証を試みる。

司会：水本有紀（甲南大学非常勤講師）

2 「ハワイの婦人参政権運動ーその重層的な意味合ー」

安武留美（甲南大学）

1912年、世界婦人参政権協会(IWSA)のキャリー・C・キャットのハワイ訪問を機に、ハワイ婦人平等参政権協会(the Woman's Equal Suffrage Association of Hawai'i, WESAH)がホノルルに誕生した。WESAHは、アメリカの全国婦人参政権協会(NWSA)のハワイ支部として活発な婦人参政権運動を展開したが、その事実に注目した歴史的研究は皆無であった。本土の活動家と連携しながらこの運動を牽引したのはどのような女性たちであったのだろうか？本発表は、20世紀のはじめに繰り広げられたハワイの婦人参政権運動を、その歴史的文脈の中で、ジェンダー、階級、人種など多様な視点から考察するものである。

1820年に、アメリカ北東部から到来したアメリカ人宣教師たちは、ハワイ王国の近代化そして「民主化」に寄与した。19世紀始めの王制下の伝統的ハワイ社会では、性や人種の以上に身分(rank)が重視され、高い身分の女性たちは政治的にも指導的役割を果たすことが期待されていた。しかし、砂糖を基幹産業とするハワイの近代化は大量のアジア系移民労働者の流入を招き、さらにはアメリカ的「民主主義」とジェンダー規範の拡大が国王及び女性の権利を縮減し、1893年アメリカ系白人による君主制の転覆そして1894年共和国建設を促した。合衆国の政治理念にかなったハワイ人たちの反対運動は、共和国政府と合衆国政府に締結された併合条約が合衆国上院で批准されるのを阻止したにもかかわらず、1898年、米西戦争の勃発により上下両院の合同決議によってハワイはアメリカによって併合され、1900年その一準州となったのである。

ハワイのアメリカ併合は、19世紀末までに、本土のフロンティアを終焉させ世界最大の製造国となるアメリカの帝国主義の一例と言えるが、20世紀のはじめ、かつてアメリカ的ジェンダー規範を唱えて伝統的ハワイ社会の男女関係の変容を導いてきたアメリカ人婦人宣教師の娘世代にあたる女性たち、また宣教師世代の努力に逆行する女性の政治的権利の拡大を唱えた本土の参政権運動家は、ハワイのアメリカ化とどのように関わったのか？また、女性が参政権を獲得することは、既のハワイ最大の人種グループとなっていたアジア系移民女性たちにとってどのような意味があったのか？本発表では、このような点についても言及したい。

講演会 16:20-17:30

司会：中井誠一（島根大学）

「バートルビーの鏡」

青山義孝（甲南大学）

クリスタルの星クリプトン星から地球へやってきたスーパーマンはクラーク・ケントの鏡像である。黄帝の鏡の国がそうであったように鏡の国は異界であり、鏡の中の世界と鏡の外の世界はそれぞれが独立した世界として存在している。シレノスが言うように鏡の中にいるのが自分ではなく他人であるのならば、鏡に映っているのは何か。

『白鯨』の冒頭で、イシュメールが投宿する宿は“The Spouter-Inn:--Peter Coffin”である。つまりイシュメールは物語第一夜に石棺に入るというわけで、このイシュメールが物語最後のエピローグでは棺桶の救命ブイにしがみついて一命を取り留めることになるわけであるから、『白鯨』は石棺に入って死の世界を旅した後、再び棺桶を通してこの世に戻ってくるという構図となる。

投宿の描写の少し前にメルヴィルが触れるのがナルシスのエピソードである。ナルシスが泉を覗きこんでみたものをメルヴィルは“the image of the ungraspable phantom of life”であると言う。しかもそれが「すべてを解く鍵である」と言う。生の幻とはいったい何なのか。そしてそれがすべてを解く鍵であるとはどういう意味なのか。

ナルシスと泉の話には水仙バージョンと溺死バージョンの二つのバージョンがあるが、メルヴィルが選んだのは溺死バージョンである。水と死の結びつきは根源的なものと考えてよいが、一方で水は生命の源でもあることを考えれば、水は生と死と再生のイメージと密接に結びついている。

泉に落ちて死んだとするナルシスを描いた作品に四大中世文学の一つ『薔薇物語』があるが、作者の一人のド・マンは作品の末尾で「ここオリーブの葉の下に／命の泉流る／そは救いの果実をもたらさん」と書いている。この「命の泉」がメルヴィルに当てはめれば「捉えられそうでいながら捉えられない生の幻」ということになる。

メルヴィルが描くナルシスは二人おり、もう一人のナルシスはバートルビーである。バートルビーは“dead wall”つまり「死の壁」の夢想にふけてばかりいるが、バートルビーはいったい何を見ているのであろうか。もちろん壁を見つめているのだが、壁の手前には窓ガラスがある。壁の手前にガラスがあると

いうことは、バートルビーは鏡を見ていることになる。さらにメルヴィルはバートルビーが見つめている窓と壁の間の空間を水槽に喩えている。バートルビーは“a huge square cistern”にそっくりな空間を窓ガラスの向こうに見ているわけだから、垂直方向と水平方向の違いはあるが、ナルシスもバートルビーも水鏡を覗きこんでいるのである。とすればバートルビーもナルシス同様「生の幻」を、あるいはド・マンの言う「命の泉」を見つめていることになりはしないか。

バートルビーの水槽は窓ガラスの向こうに空間があり、壁があるという構造である。その窓ガラスが鏡の役割を果たしているわけだが、バートルビーは法律事務所を退去させられてから墓場とも呼ばれる刑務所に行き着く。そこでもまた中庭に座って壁を見つめながら夢にふけることになるが、法律事務所での夢と刑務所の中庭での夢には違いがひとつある。中庭と壁との間に窓ガラスがない。つまり法律事務所で見つめていたバートルビーの前から鏡が姿を消し、壁そのものを見つめることになるのである。これと似た鏡がコリント前書にある。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう。」

刑務所に移ったバートルビーは鏡を通してではなく物そのものを見ることになる。ナルシスになぞらえて言えば、“the ungraspable phantom of life”ではなく“life”そのものを見ていることになる。lifeはimmortalityでもありeternityでもあるわけだから神でもある。プラトンは水鏡に映る像をphantasmata theiaと呼んだが、これは英語に直訳すればphantoms of a godとなる。つまりメルヴィルのナルシスが見た“phantom of life”である。

バートルビーは以前、Dead Letter Officeで働いていたが、dead letterとは法律関係の用語として「死文」の意味があり、バートルビーは法律事務所に雇われる前から一貫して「死文」を相手にしていたことになる。「文字は人を殺し、霊は人を生かす」とあるように、文字のみに仕えて霊に仕えない者は滅ぶとされる。霊がなければ、神の言葉といえども、死文の羅列からなる神の律法の書、約束によって希望を与えられながらなんらそれをかなえてくれない空文となる。この死文、空文がdead letterである。

“errands of life”に出て手紙としての文字は死へと急ぐ、これがdead letterであるが、このlifeはナルシスが追い求める“phantom of life”のlifeへとつながる。配達不能郵便物課で働いていたということは生の使いへと赴きながら使命を果

たすことなくむなしく返送されてきたletter、すなわち人間に届かなかった神の言葉を処理していたということである。言葉、すなわちロゴスはキリストの別称でもある。ロゴスはキリストであり、生であり、光である。バートルビーをキリストと見なす解釈が多いのもうなずけるところである。